

## 退魔一族紅 最終話 開闢の祖紅葉編

山の奥深くにあるその場所——紅の里は、周囲一里四方を紅葉の木々によって囲まれている。秋になると、紅葉の葉が色づいてこの地一帯を紅く染めることからその名がつけられたと言われていた。

なぜ紅葉の木が里の周りに植えられているかといえば、その理由は単純明快である。紅の一族の開闢の祖が名を「紅葉」といったからだ。

一族開闢の祖・紅葉は、人の姿形をしているが人間ではなく、魔を退ける力に長けた土着の神である。一族に残された伝説によると、いまから四〇〇年ほど昔、紅葉が人と交わって子を成したことが、一族の発祥になったのだという。

相手は旅の若い男で、その名前は伝わっていない。なれ初めは紅葉がその若者をバケモノから助けたことが発端で、その時に若者が紅葉にひと目惚れしたのでという。紅葉は最初、自分にまとりつくこの若者を相手にもしなかったそうだが、それでも、若者の熱意と情熱に負け、次第に心を開いていったそうだ。

だが、破局はすぐに訪れた。近隣のバケモノたちが、紅葉を倒すため、彼女に恋をするこの若者を利用したのである。若者は数十体ものバケモノに取り憑かれて異形と化し、紅葉に襲いかかってきた。紅葉は、どうにかこの襲撃を退けることには成功したものの、バケモノたちに取り憑かれた若者は全身の力を吸い尽くされて抜け殻のような状態となってしまう、その命はいまにも尽きようとしていた。若者は最後、紅葉と結ばれることを望み、紅葉はその願いを叶えた。一夜、紅葉と若者は結ばれた。そして夜が明けた時、若者は力尽きて死んでいた。しかしその死に顔は、実に安らかな表情であったと伝えられている。紅葉はその後、子どもを産んだ。男児であった。

紅葉は自分が産んだ子どもに神通力を扱う術を教えると、退魔の使命を継がせ、自らは洞窟にこもって深い眠りについた。愛した男を失った悲しみを

癒すために。

母から使命を受け継いだ紅葉の子は諸国を流浪してバケモノ退治に精を出し、やがて旅先で出会った娘と結ばれて子を成した。そしてその子どもも成長して孫も生まれた頃、長い旅の生活に終止符を打ち、母が眠る地へと戻ってきて里を築いたのだった。紅葉の子は、死ぬ間際、この地で子どもが生まれるごとに紅葉の木を植えるよう遺言を残し、天寿をまっとうしてこの世を去った。

彼の一族はその後、姓を「紅」と改め、この地を根拠地に据えて祖先の意思を継いでバケモノ退治に精をだした。紅の一族はいつしか退魔の集団として有名になり、かくして現在にいたる。

……紅の里はいま、紅く染まっていた。色付いた紅葉によるものではなく、放たれた業火によって。

「進め、進め、我らが眷属どもよ。使える雄どもは食んで同胞とし、強い身体を持った雌は捕らえて我らの母体とするのだ。老いた者は殺せ、役に立たぬ者も殺せ。蹂躪せよ、征服せよ、屈服させよ。そして、この地に眠る「神」を引きずりだしてくるのだ」

顔に愉悦を浮かべ、異形の軍勢を率いながら、男が炎を放って全てを燃やし尽くしてゆく。人を、家畜を、家屋を、里の全てを、奪った神通力を使って、嬉々とした笑みを浮かべながら、全てを炎で焼き尽くしていくのである。その姿はまるで具現化した悪夢そのもののように見えた。

いまやほとんど人間と同じような外見と化し、自らを第八天星王ジュラと自称するようになったこの異星の生命体は、自ら異形の眷属たちを率いてこの地へと攻め込んできたのであった。母体を確保するために、そして自分たちの至上の命題を果たすために。

紅の里はいまや阿鼻叫喚の地獄と化していた。いたるところで悲鳴が上がり、助けを求める声が聞こえる。殺戮が実行され、不要と判断された者たちが惨たらしい方法で惨殺されてゆく。生きながら身体を侵蝕され、先ほどまで味方だった同胞に襲いかかる者も少なくない。そして、若い女たちが異形

のバケモノたちによって襲われ、里の各所で強姦の憂い目に遭った。その有り様は、目を覆いたくなるほど惨たらしい光景であった。

ジュラが率いる異形の眷属たちは、増殖に増殖を重ね、いまや数千体にまでその数を増していた。その種類は実に様々であり、元人間、元獣、元土着のバケモノなど、様々な姿をした哀れな犠牲者たちが、身体を内側から喰われながら、侵略の列にその身を置いていた。彼らに共通する点は、目や耳、口や体表の一部から外へと飛び出して蠢いている触手であった。

彼らは獰猛にして凶悪だった。そして、無慈悲にして悪虐だった。抵抗する者は容赦なく殺し、使えそうな者はその身を内側から食んで同胞とすると同時に、若い娘や肉体的に健康そうな女は捕まえるとその場で犯し、身体の具合を確かめたうえで母体とした。両親の目の前で強姦され、破瓜の痛みにのたうちながら、大量の触手によって胎内を蹂躪されたのは、まだ年齢が二桁にすらなっていない少女であった。彼女は気が狂わんばかりの勢いで泣き叫んでいたが、容赦はされず、腹が破裂する寸前まで触手を詰め込まれた。この少女と同じく、標的とされた他の女性たちも同様に、触手によって胎内を蹂躪され、腹を巨大に膨らまされた。そして、悲鳴を上げながら産み落としたのである。紫色の表皮を持つ、人の形をした存在を。

「クク、ククク、ククククク……」

母体となった女の秘穴を裂いて、低い笑い声を発しながら、彼らはこの世に姿を現した。全身を羊水で濡らしたままの状態で。

彼らの頭部には一本の頭髮もなければ、一切の体毛もなく、目も、鼻も、口も、耳さえもなかった。異相だった。

この人の形をした異相の生命体たちは、いまやその数を数十体にまで増やしていた。全て、人間の雌の子宮を利用して誕生した、次世代種たちである。

「ククク」

「ククク、クク」

「クククク」

彼ら異星の生命体たちは、高度な知的能力を有した母体が存在しなければ、

他の生命体を内側から蝕んで増えるだけの下等な生命体に過ぎない。ゆえに、到着した星によっては、進化することができずにそのまま単純な触手生物として終わることもあるのだ。ゆえに、侵略される側からすればたまったものではないのだが、この星に到着できたことは彼らにとつてはまことに幸運であったといえた。

異形のバケモノの大群に襲われて、紅の里はもはや壊滅状態にあった。里に残されていた者たちは、里の精鋭たちが不在の時を狙われたと思い、その不運を嘆いたが、その認識は事実と異なる。精鋭たちはすでに壊滅しており、一部の女たちを除いて皆殺しの憂い目にあっていたのだから。

蹂躪される里で抵抗する者は、もはやわずかになっていった。族長の良房以下、ほんの数名だけで、両手の指で足りる数しかない。その中には、里で休養していた「美しき武者巫女」の異名を持つ紅桔梗の姿もあった。彼女はまだ万全とはいえない体調であったが、里の危機に手をこまねいていることはできなかったのである。

桔梗は刀を手にすると、迫り来る異形のバケモノたちに戦いを挑み、そして気がついた。

（こいつらは……前に戦った大猿のバケモノと同じだ！）

里の者で、唯一、異星の生命体に遭遇して無事だった彼女だが、その末路はある意味ではより悲劇的だったといえる。

刀を構えた桔梗の目の前に現れたのは、彼女が腹を苦しめて産み落とした最初の異星の生命体・ジュラであった。ふたりが対峙した時、桔梗はそうとは気づかなかつたのだが、ジュラはすぐに気がついた。

「ほくう、誰かと思えば我が「母」ではないか。元気そうだなによりだ」

「だ、誰だ、貴様は！」

「覚えていないのか？ ならば改めて自己紹介をしようか。我が名は第八天星王ジュラ。おまえたちの災厄だ」

言うなり、ジュラが地を蹴った。そして、刹那に満たぬ一瞬で、桔梗の目の前に迫ったのである。それは恐るべき速度であり、人間では不可能な動き

だった。ゆえに、桔梗はとっさに反応できなかった。

「くっ！」

桔梗は慌てて刀を振るったが、ジュラの反応速度はその動きを完全に上回った。

拳を軽く握り締めると、それを優しく桔梗の腹に打ち込んだのである。

「ガ、ハッ——」

それで終わりだった。まるで石射砲の直撃を受けたかのような一撃を喰らった桔梗は、胃の内容物を逆流させてそれを口から撒き散らすと、そのままその場に崩れ落ちてしまったのである。手から離れた刀が非金属的な音を立てて地面に転がった。

桔梗は強かったが、ジュラはそれ以上に強かった。桔梗など、もはや足下にすら及ばないほどに。

ジュラは崩れ落ちた桔梗の髪を掴み、無理やり引き起こすと、顔を近づけて覗き込んだ。桔梗は口の周りを胃液や涎で汚しながら、半ば白目を剥き、顔を苦痛で歪めていた。この顔つきを見るのが、ジュラはたまらなく好きだった。

「どうやら、まだ使えそうだな。安心するがいい。壊れるまで——死ぬまではきちんと使ってやるからな」

そう言ってジュラは桔梗の身体を宙に放った。眷属たちがすぐに群がって、襲いかかる。触手を伸ばし、手を伸ばし、彼らは桔梗が着ていた着物を剥ぎ取ると、全裸姿にしてその身体を貪りはじめた。桔梗がハッと気がついた時、もはや全てが手遅れであった。

「ひッ！ や、やめろ、わ、わた——ギッ、ひいひいひいひいひいひいひいッ！」

全ての言葉を言い終わるよりも先に、桔梗の秘穴に人間の太腿ほどあろうかという巨大で太い生殖器が挿入された。と同時に、肛門にも腕ほどの太さがある触手がねじ込まれ、口からも同様の触手が入ってきた。

「ぐッ、ぶぐううううううううッ！」

くぐもった悲鳴が生じ、桔梗の瞳が大きく見開かれた。その目には、大粒の涙が浮かんでおり、それが頬を伝って流れはじめた。

桔梗の身体が蹂躪される。無慈悲に強姦される。腹が生殖器の形に盛り上がり、内臓の中を触手が進んでいくのが表面からさえも見てとることができた。異形のバケモノたちは、桔梗の豊かな身体を貪りながら、その身体が「母体」として耐えうるかを検証した。かくして桔梗は再び「母体」と化し、異形の生命体を孕む運命を辿ることになるのだが、それはまた別の話である。桔梗を倒したジュラは、もはや彼女のことなど記憶の彼方に消し去って、その足で里の外れにある古びた社を訪れた。

この中に、彼が求めている存在が眠っているはずなのだが、果たしてどうか。

「さて、いるかな」

ジュラが社に触れた次の瞬間である。

バリバリバリバリッ！

雷鳴が生じ、社の中から放たれた雷がジュラを直撃した。

と同時に、社の中から声がした。果てしない怒りに満ちた声が。

「……誰じゃ、私の眠りを妨げる者は。我が里を襲っている者は！」

その声を聞いて、ジュラはうれしそうに笑った。

「見いっつけた♪」

雷の直撃を受けても、彼はまったくの無傷であった。

続きは本編にて